

当該病棟における転倒転落の現状と分析

5階東病棟 ○手島理恵 大力茂 和田啓佑 樋口望美 手島貴美子

【目的】

我が国では高齢化率が全国平均 26.3%と超高齢化社会であり、特に朝倉医療圏内では高齢化率 30.7%と高くなっている。入院患者においても転倒リスクの高い患者は増加しており、転倒により入院時疾病の治療中断や入院期間の延長、医療費の増大、ADL・QOL 低下するため、患者に不要な苦痛をあたえてしまっている。平成 28 年度、当病棟のセーフマスター報告のうち転倒転落は 26% (31 件) を占め、4 件の骨折事例を医療安全管理室へ報告した。日頃、病棟カンファレンスを行い、室内の環境整備、状況に応じたセンサーの使用などで転倒防止対策を講じている。転倒した患者の分析を行うことで新たな視点を見出すことを目的に取り組んだ。

【方法】

研究対象：H28 年 4 月 1 日～H29 年 3 月 31 日までに当該病棟で発生した転倒転落事例対象 31 件

研究方法：対象の年齢、性別、入院日数、入院前の住居、ADL、転倒スコア危険度、発生状況、絶食の有無、栄養評価等 30 項目について分析をおこなった。

【結果】

分析の結果、性別は男性 65%と割合が多かった。男性では 80 歳代 47%と最も多く、女性では年齢による有意差はなかった。入院 7 日目以内の転倒転落は 48%、0 時～8 時の間に 64%発生し、就寝前に睡眠薬を服用していた患者は 50%であった。転倒転落時の状況においては排泄行動が 32%と最も多かった。転倒した病室を調査した結果、ナースステーションに近い 503 号室で 35%発生していた。入院前の生活環境は、自宅 81%、施設 13%、病院 6%。ADL は自立 41%、一部介助 38%、全介助 19%。介護度は認定なし 38%、要介護 1 は 25%。認知機能が低下している患者 65%。絶食中の患者 29%、アルブミン 3.4 g/dl 未満の患者 77%。ヘモグロビン 10 g/dl 以下の患者は 48%であった。

【考察】

当病院でも入院患者における高齢者の割合は多い。80 歳では 20 歳と比べると筋力が 30%低下し、特に男性では、ホルモンの関係で骨格筋が低下しやすいことから 80 歳代男性の転倒が多かったと考えられる。高齢者の中には出来るだけ自宅で生活したいと考える人も多く、入院前に自宅で生活している患者であっても転倒リスクが高いと考える必要がある。また、7 日以内の発生が多い理由として、疾患の急性期症状だけでなく、入院による環境の変化に対応しきれていないという高齢者の特徴があげられた。転倒転落時の状況では排泄行動における報告が多く、身体機能の低下や排泄の切迫感による焦燥感や羞恥心によるものが考えられる。当病棟では消化器病棟であり、栄養状態不良の患者も多いことから、身体機能の低下も考えられる。また、絶食中の患者が 29%であり、絶食による生活リズムの変調がおきたことで見当識障害の出現の誘因ではないかと考えた。入院時からアセスメントを行い、ナースステーションに近い部屋で観察しているにも関わらず、転倒事例が発生している。そのうち 91%はスタッフの少ない夜間に発生しているため、日中は近い部屋で目が行き届き、トイレ歩行ができているという安心感があっても、その都度アセスメントを行う必要があると考える。

【まとめ】

当院では転倒転落アセスメントシートを用いてリスク評価を行っている。今回 30 項目の分析で栄養状態や絶食も影響を及ぼしていることが数値で伺えた。しかし、看護記録では転倒後の患者の状態や処置、対応は記録されているものの、起因となる記録が書かれていない事も多かった。今後、

転倒転落を予防するためにも、病棟スタッフ間で情報を共有できるように、具体的な看護記録を残していく必要があると考える。

【文献】

- ・地域医療情報システム福岡県朝倉 <http://jmap.jp/cities/detail/medical-area/4005>
- ・川上和秀 賀数市子 福地浩他 看護スタッフの転倒事故予防に対する、意識向上をめざして—KYTを試みて
- ・急性期病院における転倒・転落の現状と診療科ごとの特徴：インシデント報告から
壇美津代 武井真由美 金井優宜 橋本健一郎 浅井聡
- ・山田実 高齢者のサルコペニアと転倒